

保育園と大学との連携造形活動による保育の質的深化の試み

—— 保育者・大学教員・大学院生・保護者の学び合いの実践構造について ——

笠原 広一*¹・真木 千壽子*²・鉄矢 悦朗*¹・加山 総子*³・大塚 菜々美*⁴・
千野 希帆子*⁴・白神 瑛子*⁴・谷黒 杏花*⁴・肥前 新菜*⁴

美術科教育分野

(2019年6月19日受理)

KASAHARA, K., MAKI, C., TETSUYA, E., KAYAMA, M., OTSUKA, N., CHINO, K., SHIRAGA, E., TANIGURO, K. and HIZEN, N.: Experimentation of Collaborative Art Activities between A Nursery School and A University for Deepening the Quality of Early Childhood Care and Education: Structure of the Practices to Promote Mutual Learning for Nursery School Teachers, University Faculty, Graduate Students, and Parents. Bull. Tokyo Gakugei Univ. Division of Arts and Sports Sciences., 71: 79-93. (2019)

ISSN 2434-9399

Abstract

This research is a practical study of art activities, exhibitions and conferences that are carried out in cooperation with nursery school teachers, university faculty, and graduate students. The purpose of this practical study is to produce a qualitative deepening of childcare through collaborative art activities between a nursery school and a university. Practices were reviewed for one year and considered for specific qualitative deepening. As a result of considering collaborative practices with various collaborators, this year's practice structure formed the following five phases.

- 1) Collaborative art activities ten times a year
- 2) Conference with nursery school teachers once every semester
- 3) Workshops and lectures for nursery school teachers
- 4) Parent-child workshop
- 5) Exhibition, conference with parents, and presentation of practical reports by nursery school teachers, university faculty, and graduate students

The deepening of learning through these practices has produced the following;

- ・ For Nursery school teachers: It enriched their childcare, overall quality deepened, improved the qualities and abilities of Nursery school teachers who continue to learn, and created a qualitative deepening of childcare for the entire Nursery school.
- ・ For university faculty: new insights about what art activities can do in childcare were created.
- ・ For graduate students: They gained feedback from nursery school teachers through collaborative practice and were able to deepen their awareness and learning. Furthermore, it served as training as practitioners and researchers of education.
- ・ For parents: They learned different aspects of their children than they usually look at, and their children changed and grew in childcare and with art activities. It was an opportunity to share events about their child's growth and deepen their understanding.

*1 東京学芸大学 美術・書道講座 美術科教育分野 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

*2 特定非営利活動法人 東京学芸大こども未来研究所 学芸の森保育園 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

*3 東京学芸大学 個人研究員 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

*4 東京学芸大学大学院教育学研究科 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

Keywords: art education, quality of early childhood care and education, action research

Department of Art Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本研究は大学内の保育園と大学教員と大学院生が連携して取り組んでいる造形活動と作品展, カンファレンスを対象にした研究である。保育園と大学との連携造形活動による保育の質的深化を生み出すことが目的である。一年間の実践を概観し, 保育者・大学教員・大学院生・保護者の学びから, 保育を質的に深化させる実践構造を明らかにした。その結果, 様々なコラボレーターとの協同実践を振り返る中で, 次の五段階の実践構造が形作られた。

- 1) 定例の連携造形活動 (年間に10回実施)
- 2) カンファレンス (各セメスターに実施)
- 3) 研修会・講演会
- 4) 親子ワークショップ
- 5) 作品展, 子どもアートカンファレンス, 実践報告会

これらの実践からコラボレーターにとって以下の学びが生み出された。

- ・保育者にとって: 自分の保育を充実させ, 質的に深化させ, 学び続ける保育者としての資質と能力を高め, 園全体の保育の質的深化を生み出した。
- ・大学教員にとって: 造形活動が保育全体の中で何を可能にするのかについての新たな知見が生み出された。
- ・院生にとって: 園と連携した実践を行い, 保育者たちからフィードバックを得たことで, 気づきや学びを深めることができ, 教育の実践者であり研究者としてのトレーニングにもつながった。
- ・保護者にとって: 普段見ている我が子とは異なる側面や, 保育, 造形活動の中で浮かび上がってくる我が子の姿を知り, 子どもの育ちについて共に出来事を共有し, 気づきと学びを深める契機となった。

1. はじめに

本研究は, 大学内の保育園と大学教員が連携して取り組む連携造形活動 (笠原・小室, 2016, 2017; 笠原・真木・鉄矢・小室・塚本, 2018) と園内研修を軸にした実践を通して, 保育者の学びと大学院生の学び, 園と保護者との間の子ども理解の共有と深化の姿を描き出し, 保育園と大学教員との協同的なアクションリサーチを通じた, 保育の内容と質的な向上の取り組みのモデル構築を目的とする。

2016年度より開始した連携造形活動も今回で三年目が終わり, 造形活動の充実のみならず保育全体の質的变化にもつながる取り組みが保育実践の基盤に根付き始めてきている。そこで, この三年間を一つの区切りとして, ここまでの取り組みを素描するとともにステップとして整理し, 造形活動での連携をきっかけとして展開する保育全体の質的な深化と改善へとつなげる知見を構造化する。もちろん三年間の取り組みはまだまだ期間としては短いものであり, 保育実践は絶えざる実践の省察と改善の継続であることは確かだが, 活動に関わる当事者たちが行ってきたものが現段階で何を生み出し, それがどんな構造をもった取り組みであるのかを客観視することは意義がある。当時にこうした素描と考察は, 協働しながら活動を生み出して

る保育者, 大学教員, 大学院生の間にいかなる知をもたらすものなのかも浮き彫りにする。その成果は, 保育園においては保育実践の深化と改善につなげる知見となり, 大学教員にとっては園との連携や造形活動実践の改善につながる知見や, 造形活動を軸にした保育全体の質的改善の支援策の構築につながり, 教員養成のカリキュラムや講義・演習へのフィードバックを得ることにもなる。大学院生にとっては幼児期からの美術教育の理解と実践力の向上, そして実践研究力の育成につながると考える。

そこで以下, 「2. 2018年度の連携造形活動」, 「3. 作品展」, 「4. 子どもアートカンファレンスの取り組み」, 「5. 大学院生の実践と実践研究発表」を概観し, 公益財団法人日本生命財団からの委託研究として取り組んだ「6. 委託研究による園内研修会と講演会等」の概要を示し, 年度末の作品展で実施した「7. 保護者と保育者へのアンケート調査」の考察を示す。最後に一連の取り組みを考察し, 「8. 連携実践と質的深化のプロセス」を提起する。

2. 2018年度の連携造形活動

2.1 2018年度に至る三年間の概況

初年度 (2016年度) から連携造形活動がスタートし,

月一回程度、大学教員（笠原）が院生とともに園に向いて90分程度の活動を実施している。初年度の年間計画は園長（真木）と笠原が打ち合わせを行って決定していた。保育現場も大学もタイトなスケジュールで、保育者と打ち合わせを行う時間がなかなか取れないことが課題であった。しかし、年を追うごとに保育者と直接打ち合わせを行い、振り返りを一緒に行って次の活動を計画するように変化させていった。特に2年目（2017年度）に連携造形活動の後半に大学院の授業を組み込み、院生がクラス担任と相談して造形活動と作品展に取り組んだことをきっかけに、保育者と大学教員や院生が直接話し合い、長期的に展開している保育のテーマやプロジェクトと関連させた活動をつくりだすことができるようになり、子どもやクラスの様子、目的を共有しながら連携する枠組みが定着した。3年目（2018年度）はさらにコミュニケーションが密になり、相互の学び合いが深まってきている。

2.2 2018年度の活動内容

毎月一回の連携造形活動は定例となってきた。5月から7月はクレヨンや絵の具を使った描画、屋外での土粘土を使った活動など、身体で感覚で楽しむ造形活動を重視している。9月から12月は自然素材での工作や絵本づくりによる物語表現など、表したいイメージを形にする活動や物語が含まれるものになり、1月から2月は院生が参画し、2月中旬の作品展を念頭に協同的な制作活動が行われる。それらがクラスでの日々の描画や工作、キャプションやドキュメンテーションとともに展示される。会期中には子どもアートカンファレンスも開催され、保育者が年間の保育で大事にしていることや見えてくる子どもの姿について報告がなされ、参画した大学院生もポスター形式で実践報告会を行った。



図1 第1回5/16日(水)クレヨンで絵を描こう



図2 第2回6/6(水)絵の具で絵を描こう



図3 第3回7/4日(水)フィンガーペインティング



図4 第4回9/19(水)土粘土で遊ぼう



図5 第5回10/24(水)ローラーで絵を描こう(1,2歳児)
第6回10/31(水)ローラーで絵を描こう(3,4,5歳児)



図6 第7回12/5 (水) 絵本をつくろう



図10 作品展 2/21 (木)～23 (土) 作品展-にぎやかなおまつり かいー, 子どもアートカンファレンス



図7 第8回1/16 (水) ちぎって, まるめて, おまつり屋さん



図8 第9回 2/13 (水) 段ボールでにぎやか屋台～花火を打ち上げよう～ (前半)



図9 第10回 2/20 (水) 段ボールでにぎやか屋台～花火を打ち上げよう～ (後半)

3. 作品展

3. 1 院生との造形活動

毎月定例の連携造形活動も年を明けた1月からは院生が参画し、造形活動と一緒にいった後、作品展を開催する。その際の活動は子どもたちが現在関心をもっていることや取り組んでいることから立ち上げていく。今年は「まつり」をテーマにした活動が継続していた。保育者が子どもたちと話し合いを重ね、そこに院生も合流し、「まつり」のテーマに関連した造形活動に取り組みながら、作品展を準備していった。

院生が担当した第8回(2019年1月16日)の「ちぎって, まるめて. おまつり屋さん」では子どもたちはお祭りの屋台をイメージし、お花紙を使って、たこやき, りんご飴, 焼き芋, お弁当, 祭りの衣装などを作った。活動の後半では椅子にカップを並べて実際に屋台のお店やさんごっこを始める子もいた。

第9回(2019年2月13日)の「段ボールでにぎやか屋台～花火を打ち上げよう～(前半)」では、祭りの中央のやぐらをつくり、段ボールを使って出店を作って前回作った食べ物などを並べ、祭り全体の会場を作り出した。なかには駐車場にロードサービスのお店と車両を作る子や温泉を作る子もいた。

第10回(2019年2月20日)「段ボールでにぎやか屋台～花火を打ち上げよう～(後半)」では、黒い大きなロール紙や紙皿に蛍光塗料を使って花火をイメージして絵を描いた。ロール紙の花火の絵でやぐらを覆い、暗くなった内側からブラックライトを照らすと夜空に花火が打ち上げられたように鮮やかに絵が光り出すしくみである。

こうして院生による三回の活動によってクラスでのこれまでの祭りの取り組みが造形物や展示となって具体的な形として広がりだした。

3. 1. 1 一回目の作品展 (2016年度)

初年度 (2017年度) の作品展は展示そのものが園にとって初めての取り組みであったこと, 大学教員や院生らも園と共同で実施することも初めてであったこともあり, まずは連携造形活動の作品を展示し, クラスで作ったものもあわせて展示するシンプルな展覧会だった。キャプションも活動名や名前の記載がある程度で, 月齢の記載があるとよいというアンケートのコメントなどは, 今回は準備できなかった点として次年度には盛り込むことを保育士と確認した。

観覧した保護者の感想 (笠原ら, 2019) では「子どもならではの自由な発想が目に見える形で現れるのがおもしろい」, 「造形活動を通して, 自分の顔や生き物や身近な物をよく観察して理解していくんだなあと思いました」, 「自由な想いを迷いのないまっすぐな手の動きを通じて, 作品一つ一つが生き生きとしているようです。大変感動しました」, 「朝の10分位のわずかな時間でも, ハサミで切ったり, 絵も描いたり創作している子どもを見て, 日頃の活動を垣間見るような気がします。思ったことひらめいた事を形にする力をどんどん育てて欲しい」といった声が聞かれた。作品を通して子どもの活動中の様子や気持ちが見えてくること, そこから普段の子どもの姿を捉え直したり, そうした幼児期の姿の大切さを考えたという保護者の姿が見えてくる。初年度はまず一度実際に展示してみることが最大の目標であったが, キャプションについてのコメントのように一年間のどの時期の活動かによって子どもの姿や表現の意味も変わってくるため, 毎年少しずつ展示の内容を充実させ, それと連動させて保育の内容や取り組みも少しずつ改善していくことにした。

3. 1. 2 二回目の作品展 (2017年度)

第二回 (2018年度) の作品展では特にキャプションの充実に取り組んだ。月齢の記載や制作物の年間の展開の流れや, 季節毎のつながりも展示に反映させ, 子どもの表現がもつ遊び心を生かした展示になるように, 展示空間全体が一年の子どものたちの園生活を生き生きと表すものとなるように心がけた。また, 二年目には公益財団法人日本生命財団委託研究の一環で「子どもアートカンファレンス」を実施し, 展示室の隣の部屋にプロジェクターを用意して, 園長や大学教員らが年間の連携造形活動をスライドで紹介し, 3・4・5歳児担当の保育士がそうした活動の中で捉えた子どもの姿や, 普段の姿とのつながりなどを話し, 保護者からの感想や質問を交えながら, 会場の保護者らとともに, 子どもの理解を深める機会をもった。カンファレンス

については「カンファレンスの感想も含めて, 子供たちが作品をつくるごとにお互いに意見交換したり発表をしたり, 大人も様々な視点の人が意見交換することで想定外の波及効果が得られて良いと思いました」, 「子どもそれぞれの気持ちを大切にしつつ作らせることを応援して頂きありがとうございました」といった意見が寄せられ, 子どもたちが造形活動を行っているときの様子やそこでの体験の意味などを感じたり考えたといった感想が寄せられた。また, 保育者にとっては同僚の保育者が保育をどう考えて行っているのか, それをどのように保護者に伝えるのかといったことも, 同僚同士で関心が高かったようで, 今回は保育士全員が参加できなかった点が次回の改善点となった。

3. 1. 3 三回目の作品展 (2018年度)

三年目 (2018年度) の作品展「作品展—にぎやかなおまつりかい—」(2/21 (木) ~ 23 (土)) では, かなり自発的な展示の改善や出展の取り組みがなされた。特に公益財団法人日本生命財団委託研究の一環で専門家を招いての園内研修会と大学での講演会やワークショップをこの間に複数回実施してきており, 大学教員との園内カンファレンスも相まって, 連携造形活動の内容が普段の保育の内容や技法につながっていったり, それを弾みに自身の保育に新たな表現活動を盛り込む姿が見られた。特に園内研修での学びを経て, これまで継続してきた日々の保育の記録にドキュメンテーションやポートフォリオという視点が加わったことで, 造形活動に取り組む子どもの姿や保育者の視点を文字や写真も使いながら作品とともに来場者に伝えることができるようになった。作品の「活動」としての側面や, モノだけでは見えてこない日々の子どもの姿や保育を描き出すことへと, 保育者の取り組みが拡張していったのである。

4. 子どもアートカンファレンスの取り組み

二回目 (2017年度) の作品展から子どもアートカンファレンスを開催することにしたことは述べた通りであるが, 三回目 (2018年度) では, 二回目の課題である保育士の全員参加が, 常勤の保育士について実現した。先に述べたように園内研修会を通して保育者が自分の保育を省察し新たな取り組みを始めたり, それまでは3歳以上児のみだった活動を1歳児にまで広げた。それによって連携造形活動に関わる機会がより多くの保育者に開かれ, カンファレンスで自身の保育について話すことがより多くの保育者の取り組みになっ

ていったのである。

カンファレンスは作品展の二日目(2019年2月22日(土))の10:00~11:30に、会場となった東京学芸大学コミュニティセンターで行った。カンファレンスは二部構成となっている。

第1部：造形活動を通して一年を振り返る

まず前半の第1部では、鉄矢悦朗(特定非営利活動法人東京学芸大子ども未来研究所理事長・東京学芸大学教育学部教授)、真木千壽子(学芸の森保育園園長)の挨拶の後、1歳児から5歳児クラスの年間の取り組みと子どもの姿が保育士によってスライドで紹介された。次に連携造形活動が紹介され、保護者と意見を交わしながら、子どもの育ちの理解を深めた。集団で進む保育の中で保育者が一人ひとりの気持ちや考え、その時の育ちの状況をふまえながら活動を考えている様子が見えてきたり、子どもたち個々の特性や持ち味を生かしつつ全体での活動がつくられていくように心を砕きながら取り組んでいる保育の様子が見えてくることで、家庭での子どもの姿と集団の中での子どもの姿とのあいだをつなぎ、双方の視点からより多面的、立体的に子どもの姿を捉えることで、我が子の育ちに安心したり、保育者や保育実践への理解と信頼が生まれるような相互理解が生み出されたように見える。それは保育者と保護者の間だけでなく、連携造形活動においても見られた。一見すると活動に入っていないように見える子が行っている、他の子とは違う発見や遊びや表現などに話が及ぶと、他の子とは違う姿を肯定的なその子なりの発見や探求と捉える視点に保護者が安心したり、他の保護者の話を通して子ども理解を豊かにしていくような姿も見られた。



図11 保育者による保育実践についての発表

第2部：アート活動から見えてくる子どもの多様性

続く第2部では、服部祥子(公益財団法人日本生命財団理事・大阪人間科学大学名誉教授)、熊谷修一(公

益財団法人日本生命財団理事・助成事業部長)、山本一成(滋賀大学教育学部講師)から講話やコメントをいただいた。服部理事からは幼児期の育ちが思春期を乗り越え、人が育っていく大きな力になることや、熊谷理事からはこうした人間の多様性理解の取り組みとその社会実装を財団がぜひとも積極的にサポートしていきたいと考えていること、山本講師からはアートの表現活動を通して、子どもの姿の多様性、人間理解の可能性が広がるなど、講話とともに第1部の発表にコメントをいただいた。

最後に大学院の授業「美術教育実践論演習B(ab)」の履修生が1月から2月にまつりをテーマに取り組んだ先の実践、「ちぎって、まるめて、おまつりやさん」と「段ボールでにぎやか屋台～花火を打ち上げよう～」の活動を通して見えてきた子どもの表現と技能、活動の発展プロセスの考察を発表した。発表の詳細は次章で行うが、祭りのテーマとクラスでの取り組みの様子、子どもの発達と技能などを考慮して用意した二つの活動を通して、子どもが祭りのイメージを膨らませ、発想を広げながら自分たちの「おまつり」を作った活動展開が示された。



図12 実践研究の発表を行う院生

保護者とも保育士とも違う、院生との活動の中だからこそ起きる、見えてくる姿もあれば、造形活動や造形的な素材だからこそ表したり形にすることができるものがあることや、そうした活動だからこそより積極的に意味付けられる子どもの姿があること、それもまた子どもの多様な個性や育ちを引き出し励ますものであることが、このカンファレンスを通して共有されていた。こうした対話を通して園と保護者とのあいだに子ども理解や保育の取り組みの共有が進み、保育・子育て支援のコミュニティが形づくられていくのではないかと考える。

5. 大学院生の実践と実践研究発表

それでは、大学院の授業「美術教育実践論演習B (ab)」で取り組んだ院生らはどのように活動を行い、その取り組みを考察したのだろうか。以下に二つの実践研究の内容を紹介する。

5. 1 ちぎって、まるめて、おまつりやさん

5. 1. 1 活動の概要

まず、院生による最初の活動は、2019年1月16日(水)9:30~11:00に実施した「ちぎって、まるめて、おまつりやさん」で、お花紙や新聞紙などの紙を使って、祭りの屋台のお店に並ぶものを作る活動である。カラフルなお花紙を用い、ちぎったり、丸めたり、テープで留めたりが容易にでき、幼児でも自分が思うような立体物を作ることを楽しめる活動である。「学芸の森保育園との連携造形活動—2018年度活動報告書—」(笠原他, 2019, p.4)では以下のように取り組みの概要説明がある。

お花紙と新聞紙を中心に、「ちぎる」「丸める」などの工夫を加えながら、たくさんの作品を作りました。紙コップや割りばしなど、実際にお祭りで使われる素材を上手に活用する姿も多く見られました。

学生は作ることを主とした活動を計画していましたが、子どもたちは作品を完成させた後、自らそれを実際に使ったお店屋さんごっこを始めました。その流れがあまりにも自然で、子どもたちの中に「作る」と「遊ぶ」は一直線上にあることなのだと感じました。遊びを自ら作り出すという感覚は、私たち自身が忘れかけていたものであり、今後子どもたちとの造形活動を考えていく際、大事にしていきたい視点だと感じました。



図13 「今回使うお花紙や新聞紙の特徴を、実演を交えて紹介しました。」



図14 「できないことは学生に聞きながら。私たちも『最低限のお手伝い』を心がけます。」



図15 「ペンで描いたり、紙コップや紙皿、割りばしなど、『本物』と合わせることもしました。」



図16 「実際に遊び始める様子も見られました。お客さんが行列を作っています。」

5. 1. 2 活動の様子

今回は、3・4・5歳児が一緒に活動したが、年齢や経験に応じて作る技能にも違いがあり、必要な支援も変わると考えた。そこで研究としては年齢ごとのつくる技能の違いを観察と写真データに基づくチェックリストから分析し、それを踏まえて年齢ごとの活動状況を考察した。

【3歳児】

一番最初にお花紙に触れる際、実演で示した「丸める」「ちぎる」等をまずはやってみるといふ様子が多くの子に見られた。接着に使うのは使いやすさからテープが多かった。また、「おまつり」というテーマの中で扇子やヨーヨー、ボールなどのおもちゃといった、実際に遊べるものや使えるものを作る傾向が見られた。作りながら実際一緒に遊ぶ様子も見られ、子どもたちにとっては作ることで遊ぶことがセットなのだということがわかった。他の人が作っているものに興味を示すものの、「誰かが作っているから一緒に作る」ことはなく、自分の作りたいものを黙々と作るのも特徴的であった。

【4歳児】

「ちぎる」「丸める」を積極的に取り入れながら、3歳には見られなかった屋台の売り物となる食べ物の作品が多く見られた。そんな中で自分の好きなものを与えられたテーマ(今回で言うお祭り)に当てはめる幼児もおり、完成作品はそれらの他にも星座や乗り物などバラエティーに富んでいた。描画を取り入れる子も3歳児より多かった。また、他の人が作っているものを自分も作りたいといふ作りの様子が4歳児には見られた。院生に頼んで難しい形を作ってもらう子もいた。実際に屋台としてごっこ遊びを楽しむ姿も見られ、今回の活動の目的をくみ取って楽しんでいる姿が見られた。

【5歳児】

作りたいものがとてもはっきりしていた。みんなで同じものを作る場面も見られたが、それがずっと続くわけではなく、最終的には各々が自身の作りたいものに没頭して作っていた。おにぎりの海苔の形、中に入った見えない具、着物の帯、焼き芋を割ったときの黄色など、細部へのこだわりが一番見られたのもこの年齢である。おにぎりをひたすら作る子もいればメニューを考えてお弁当を作る子もおり、活動への取り組み方はそれぞれだと感じた。今回様々な素材を使ったが、素材が持つ特徴を活用している場面と、素材を変えればより良くなる可能性が見込める場面も見受けられ、今後はそうした形にしたいものの違いに応じた素材の使い分けを準備や支援の中で考えていくことが課題である。「ちぎる」「丸める」などの基本的な動作に加え、用意した違う素材と組み合わせを試みたり、自分にできないと思うことは院生に支援を求めたりと、工夫する姿勢に感心した。

5. 1. 3 子どもたちが達成したこと

一年間みんなで楽しんできた「お祭り」のテーマを

自分たちなりに考えて、「欲しい」と思うものを形にしていくことができた。ものづくりを楽しむことの同一線上に「実際に遊んでみる」ことがあり、椅子を持ってきて屋台にしたり、お弁当箱に具材を詰めたり、店のメニュー表を書くなど、祭りに必要な場づくりを積極的に行う姿が見られた。こちらが想像したさらに先の取り組みへと発展させていく姿が見られた。



図17 「ちぎって、まるめて、おまつりやさん」の実践研究発表のポスター

5. 1. 4 今後の展望

今後の展望として、活動中の支援の在り方を考え直した。子どもたちが「次は自分ができる」と思える範囲での支援が理想であり、それ以上のことをすると子どもは支援から離れられなくなる。また、それとは反対に作りたいものをより良くするための声掛けももっとできたのではないかと反省点もある。同じものを作り続ける子に対して、小さくても変化をつけることを提案したり、素材と作っているものが合っていないときなどには素材の提案もできるだろう。こうした点は今後に生かしていきたい。

5. 2 段ボールでにぎやか屋台～花火を打ち上げよう～

5. 2. 1 活動の概要

二回目と三回目は続きの活動で、二回目は2019年2月13日(水)、三回目は2月20日(水)に9:30~11:00の時間で実施した。前回の花紙での祭りの屋台のものづくりを活かして、二回目はやぐらの周囲に

並ぶ出店の屋台を段ボールで作って並べる活動で、やぐらを囲む大きな黒いロール紙の内側に蛍光塗料で花火を描く活動であった。前回同様、報告（笠原他, 2019, p.4）では以下のように概要説明がある。

お花紙で作った作品を置けるような屋台をつくらうということから始まりました。大きな段ボールを目の前にすると「お祭り」から連想が広がり、切って組み合わせたりしながら、屋台だけでなく、お風呂屋さんやゴミ収集車など、お祭りを取り巻く様々なものが完成しました。

花火は自分で描いた紙皿花火と、みんなで描いた大きい花火を制作しました。蛍光塗料で描かれた大きい花火はやぐらの屋根部分に設置し、お祭り会場のシンボルとなりました。

素材とのふれあいや思わぬ発見からイメージを変化させながら制作する姿が見られました。出来上がったものは、やぐらの周りに子どもたちが設置したい場所を考えながら配置し、にぎやかなお祭り会場が完成しました。



図18 屋台作り：「自分よりも大きな段ボールを目の前に何を つくらう？寝転がったり、組み合わせたりしながら始めました。」



図19 「黒い紙に『お祭りの夜空』のイメージを膨らませながら、花火や星座などを蛍光塗料の絵の具で描きました。」



図20 「様々な素材を使ったり、好きなものを描いたりして自分だけの花火をつくりました。」



図21 「皆でつくったお店などが集まってやぐらの周りになぎやかになりました。」

5. 2. 2 活動の様子

今回も3・4・5歳児が一緒に活動したが、作りたものは別々であるため、それぞれにどんな活動展開が生まれたかを、子どもたちの活動の展開を記録に起こしてその流れを考察した。

【屋台づくり】

段ボールを目の前にすると「お祭り」から様々な連想し、作り出そうとする姿が見られた。「屋台」というイメージを持ち続けた子は、段ボールを切り開いたものを組み合わせて、りんご飴の移動販売車をつかった。それに対して作りながらイメージが変化していった子もいた。棚としてつくっていたものが椅子になったり、屋台がピアノに、それがまた屋台へ変化する子もいた。「箱にするとお風呂みたい!」と温泉屋さんを始める子たちもいた。完成イメージは素材との触れ合いや、思わぬ発見から次々と変わっていく。想像力の柔軟さにも驚かされる。自分がお祭りに行ったときに目にしたのだろうか、「JAFがないとお祭りは始まらないんだ!」と言って、自分が段ボールを身にまとい、JAFの帽子と制服を表現している子もいた。最初は絵を描いていた子も活動終盤では段ボールを使うことに挑戦している姿が見られた。

【花火・紙皿花火】

最初は大きな黒画用紙を前に、花火や星座、動物などのイメージを大人に聞かずとも自分から進んで作っていた。その後1人がドリッピングをすると周りがマネし始め、グループ全体の活動へと発展していった。足で混ぜたり、手で描いたりなど、体全体を使って描くことに臆することなく取り組む様子も見られた。

紙皿花火では、ペンで好きなものを描く子もいれば、蛍光塗料で描く子もいた。ペンだと具体的なモチーフが描きやすく、蛍光塗料では手で直に触りながら色を混ぜて楽しんでいった。その延長で別の紙皿に手形をつけて遊ぶ姿も見られた。それらを描いた後、紙皿の周りに画用紙をちぎって貼り付けていった。「紙をちぎるのが楽しい」と言って様々な色を組み合わせていた様子が印象的である。太陽のモチーフになっていたり、紙皿の中心にちぎり絵が出来たりしていた。

【やぐらづくり】

やぐらからどのくらいの距離に自分の店や乗り物を配置するかという場面の中で、いくつかの特徴が見られた。ゴミ収集車をつくった子は、完成すると祭りの中での自分の役割を考えて、やぐらの周りを動きながら、自分が作ったものを使って遊びを発展させていった。そりを制作していた子は「段ボールってそりみたいだ」と、素材の形や特徴を楽しんでいた。やぐらから少々離れた場所で祭りに参加したいと考え、自分のこだわりを持ってそりの配置場所を決めている様子であった。初めから祭りを想定していた子たちは、やぐらにピッタリと寄り添っており、やぐらを実際に組み立てた横で店を開いていた。やぐらという祭りを想起させるものが実際に目の前に現れたことで、子どもたちの頭の中で固まっていたイメージが、明確な場所を決めるきっかけになったと考える。

5. 2. 3 子どもたちが達成したこと

段ボールで屋台を作るときは、食べ物屋にメニューを付けたり、温泉屋と併せて券を用意したり、何かに見立てている様子が印象的であった。段ボールという自分より大きい素材に親しみを持ち、夢中になって遊んでから制作に移っていき、興味が途切れることなく取り組んでいた。花火作りではグループでの活動と紙皿での制作、屋台をやぐらの周りに設置するといった三つを自分のペースで進めていた。今回は流動的な活動であったため、子ども間で影響し合っている様子が多く見られた。マネをしてみると次に「自分は色を増やしてみよう」「真ん中にも貼ってみよう」といったアイデアが浮かび、結果的にそれぞれの違いが光

る作品が出来上がった。

完成が近づいていくと自分がつくったものに対してどこか誇らしげな表情で、誰かに見てほしいという想いを感じる事が多くあった。一人ひとりが完成させたものはそれぞれ違うが、見立てやごっこ遊びの中で友達や自分の作品を認め合い、自分のイメージにあてはめながら「お祭り」を楽しむことが出来たのではないだろうか。また、制作過程において、一人で集中して取り組んだり、数人で一緒につくる姿が見られた。自分のペースをつかみながら、創造力の赴くままに、完成を目指して進めることが出来たのではないかと考える。



図22 「段ボールでにぎやか屋台～花火を打ち上げよう～」の実践研究発表のポスター

5. 2. 4 今後の展望

子ども達と活動していく中で指導者としては、次の作業に移る時や片付けを行う時は大きなアクションを起こすなどしてメリハリをつけることが大切であると感じた。子ども達の制作時間を程よく区切り、次の作業へ移行できるような進行や声掛けの言葉選びが今後の課題として挙げられる。今回のプログラムでは子ども達の制作への集中力とエネルギーを目の当たりにした。造形活動の更なるステップアップと新たな題材への挑戦も期待できるのではないかと感じた。

5. 3 院生の自選研究発表から

これら二つの実践と研究発表を通して、院生らは自分たちが実際に子どもたちと造形活動を行うことに加

え、その実践の目的やねらいを踏まえて、その実践を捉え考察する視点や方法を学んだ。そして実際に自分たちで活動を通して子どもの技能や活動展開の創造的な流れを浮き彫りにし、実践の姿と保育上の意味、その中で捉えた子どもの姿や工夫や創造性などを、ポスターやスライドで保護者や保育者に向けて発表した。丁寧に実践を振り返って分析や考察を進めたこともあり、発表で示す一つひとつの事象に保護者たちも関心を寄せて傾く姿が見られた。自らの実践を他者に開示し、研究の視点をもってその出来事の意味を考えていく営みの大切さと、それなしには捉えられない、語ることでできない子どもの姿や造形活動の意義があることを、院生らの取り組みは示していた。こうした実践研究の取り組みを着実にやっていく力は将来の実践や研究につながっていくはずである。

6. 委託研究による園内研修会と講演会等

委託研究の一環として、園内研修と講演、ワークショップを外部の専門家を招いて実施した。内容は、乳幼児の表現活動の考え方や見方、子どもの絵と研究の歴史、ドキュメンテーションやプロジェクト、自然や生命とのつながりなど、幼児の表現活動に関わることを基本としつつも保育全体を網羅するような構成となっている。実施後の保育士へのアンケートからは、研修が日頃の疑問に解決をもたらすものであったことがわかり、学んだ視点や実践をその後の保育に取り入れていく姿が見られた。継続的な研修やサポート体制構築が今後の課題でもある。園内研修・講演等の講師と内容は以下の通りである。

2018年1月17日(水) 園内研修・講演会

講師：平田智久(十文字学園女子大学名誉教授)、伊藤裕子(学校法人裕学園谷戸幼稚園園長)「子どもの造形表現の意味」と題し、「表現」が持つ意味や脳の働きとの関連、幼稚園での実践についてお話をいただいた。

2018年7月4日(水) 園内研修・講演会

講師：森眞理(鶴川女子短期大学教授)「アートによる探究的な保育実践の可能性—レッジョ・エミリア市の乳幼児教育における学びの可視化と対話の実践から—」と題し、レッジョ・エミリア市の保育の哲学、ドキュメンテーションやアート、プロジェクトについてお話をいただいた。

2018年11月7日(水) 園内研修・講演会

講師：要真理子(跡見学園女子大学准教授)「子どもの描画と感性と創造性を考える—西洋児童美術教育の思想の系譜から—」と題し、西洋における児童画と児童画研究の歴史についてお話をいただいた。

2018年11月14日(水) 園内研修・ワークショップ・講演会

講師：磯部錦司(椋山女学園大学教授)「生命と自然を軸に考える造形芸術による教育の可能性」と題し、生命と自然に根ざした園生活と造形芸術の関わりについてお話をいただき、園児を対象にワークショップを実施していただいた。

2018年11月22日(水) 親子ワークショップによる研修会

講師：鉄矢悦朗(東京学芸大学教授)「ならべる、つなげる、つみあげる—子どもの成長に立ち会おう—」と題し、シティーブロックスを使って遊びの中で子どもの発想や工夫について保育者や大学教員がFMトランスミッター付きのイヤフォンを使ってリアルタイムで解説する親子ワークショップを実施した。

2018年12月5日(水) 園内研修・講演会

講師：高橋敏之(岡山大学大学院教授)「保育者養成における表現教育と学術研究の指導」と題し、幼児期の表現活動の意味と研究の取り組みの歴史、現在の幼児教育研究の多様な取り組みについてお話をいただいた。

2018年12月12日(水) 研修・講演会

講師：栗山誠(関西学院大学教授)「子どもが絵を描く中で何が起きているのか—描画過程を読み解く—」と題し、園生活の中で描かれる絵を通して子どもの姿や育ちを理解する視点や研究についてお話をいただいた。

(視察調査)

2018年11月28日(水) 社会福祉法人わこう村 和光保育園(千葉県富津市)を訪問し、ポートフォリオの活用や探究的な保育実践、保護者との協働や子育て支援などのコミュニティづくりについて鈴木眞廣園長、鈴木秀弘副園長にお話を伺った。

2018年12月3日(月) 社会福祉法人愛泉会えじり

保育園（静岡県静岡市）を訪問し、ポートフォリオや園内にあるアトリエの活用、職員の研修等の取り組みについて井出孝太郎園長にお話を伺った。

2018年12月17日（月）社会福祉法人赤碕保育園 赤碕こども園（鳥取県東伯郡琴浦町）を訪問し、ポートフォリオや園内にあるアトリエの活用、職員研修等の取り組みについて片桐隆嗣園長にお話を伺った。

7. 保護者と保育者へのアンケート調査

過去二回の作品展同様に、3年目（2018年度）となる今回も保護者にアンケートを実施した。来場者47名から以下の回答を得た。

Q1：ご年齢をお選びください

10代未満	0名	0%
10代	0名	0%
20代	4名	9%
30代	16名	34%
40代	16名	34%
50代	1名	2%
60代	6名	13%
70代	3名	6%
未記入	1名	2%

Q2：ご所属についてお聞かせください

園児の家族	38名	82%
東京学芸大学生	2名	4%
園児及びその家族の知人	1名	2%
他の教育機関	2名	4%
その他	3名	6%
未記入	1名	2%

Q3：ご来場の理由についてお聞かせください

園児及び家族からの案内	20名	44%
東京学芸大学内広報	0名	0%
保育園からの案内	25名	52%
未記入	2名	4%

Q4：展覧会をご覧になっていかがでしたか。

全体的な印象をお聞かせください

大変良い	34名	73%
良い	11名	23%
あまり良くない	0名	0%
良くない	0名	0%
未記入	2名	4%

〈理由〉

(大変良い)

- ・大人が指導した結果ではなく、子どもの自由な発想を大切に自由にのびのびと表現できていて素晴らしいと思います。
 - ・一年間をひととおりに感じる事が出来て良かったです。
 - ・園児による制作過程が丁寧に紹介されていてみんなが一生懸命楽しんで作ったのだということがよくわかりました。
 - ・カンファレンスで先生方のお話を聞けて、実際の子供たちのようすや、子どもたちのやりたいことを形に残すまでの過程がよくわかりました。[遊んだ跡]がよくわかりました。
 - ・子ども達が活動でつくったものが展示空間に置かれても、来た子供たちが遊べるようになっていることがとてもステキです。今も女の子が「りんごあめ屋さんです!」と商いしています。
 - ・にぎやかな印象でとても楽しみながら見る事が出来ました。
- (良い)
- ・作っている時の様子とセットで展示してあるので当時の状況が分かりやすい
 - ・花火の展示を子どもがすごく楽しんでいました。

Q5：印象に残った作品がございましたらお書きください

- ・おみこしわっしょい：「どんな神様にしよう」という発想に感心した。活動の動機を子供に寄り添って考えられているからこそだと思います。
- ・クレヨン画：四つ切の大画面にどの子も筆圧強くのびのびと描いているので。
- ・花火やぐら：いろいろな素材できていて面白かったです。子供たちがブラックライトや蛍光塗料を使う機会がなかなかないと思います。子供たち自身楽しめたのではないかと思います。
- ・秋のたからもの見つけた：落ち葉や自然から集めた素材で作っていて素敵だなと思いました。

Q6：展示の見やすさ、作品の並べ方はいかがでしたか

大変良い	18名	38%
良い	26名	56%
あまり良くない	0名	0%
良くない	0名	0%
未記入	3名	6%

〈理由〉

(大変良い)

- ・空間レイアウトや空間全体の体感経験も大変楽しめました。子どもも楽しんだと思います。

(良い)

- ・何才のときの作品が分かってよい(全部に書いてあっても良い)解説の字が小さいものがあるので、もっと全体的に大きくすると良い(スペースの限界があると思いますが)。
- ・全体図があるとわかりやすかったかもしれない。
- ・幼児クラスの年齢が個人のところにあるとわかりやすいかなと思いました。(年齢がわかるといいなあと思った絵があったので)全体的ににぎやかでたのしく見させて頂きました。
- ・もう少し通路が広いと良いかと。

Q7: 子どもたちの作品や園での造形活動について、

ご感想やご意見があればお書きください

- ・カンファレンスの開く前と後で、作品の見方が大きく変わりました。出来たものだけでなく、それを作る過程、活動そのものが作品だと思いました。今後さらに発展させて続けて欲しいです。
- ・色々な素材と触れたり、手法を使ったりと、色々な経験をしていると感じました。実践の話などを聞かせて頂き、より子ども達の活動の様子がよくわかりました。遊んでいる過程(エピソード)を聞かせてもらえることはとてもいいです。
- ・いつも「造形遊び」の日は帰ってきてから、「こんなことしたよ」とかいつも楽しそうに話してくれるので、充実しているなと思います。これから子供たちの自由な発想を大事にたくさん作品を作ってほしいです。
- ・1歳, 2歳, 3歳, 4歳, 5歳, はその年齢に合わせてどんな考えで造形させているのか全体的な考えが示されていると良い。

アンケートの考察

Q1, Q2, Q3の回答から展示に来た多くが保育園の関係者であることが推察できる。展示最終日のカンファレンスでは園児の保護者などを中心に観覧していた。

Q4の回答から保護者の方の多くが、作品から日頃の保育園での生活の様子や子どもの成長を感じていることがわかる。カンファレンスの内容と展示を観た感想を併せて書いたコメントも多く、展示とカンファレンスを同時に行うことに意味が有ると言える。

Q6では作品一つ一つをより深く知ることができるような改善を求める声が多く挙げられた。さらに今年

は過去の展示と比べても作品数が多く、展示が充実した反面、通路が狭くなってしまったことに関する意見が複数あった。作品数が増えたことに伴い、空間の有効な使い方を模索していく必要がある。

Q7には子どもが楽しんでいる様子や成長への喜びの声と、家ではできないような造形活動を保育園で行うことに対する期待が多く挙げられた。各々の活動のねらいをより深く理解したいという声もあり、展示や造形活動に対する関心が見えてくる。

こうした感想を含め、展示やカンファレンスで様々な意見を得たことで自分たちの実践について多くのことを省察することができる機会となったことも院生にとって大きな収穫であった。

8. 連携実践と質的深化のプロセス

保育者との連携した実践や研修、展示やカンファレンスを通して、少しずつ保育が変化し、保育を捉える視点、伝える視点と方法が充実してきたことがわかる。毎年の展示の改善はそうした保育者や園の取り組みが質的に進化していったプロセスを形として示すものである。それが結果的には、活動とともに参画している大学教員や院生の学びにもなっていることはもちろん、展示とカンファレンスを通して保護者にも多くのことが伝わっていく取り組みになっている。そこには連携造形活動を起点とした以下のような五つの段階的で継続的なサイクル(図23)が出来てきている。

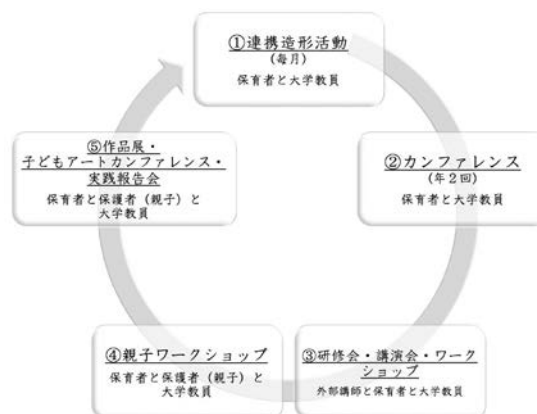


図23 連携造形活動に基づく5段階のサイクル

①まず外部講師による「連携造形活動」が始まり、保育者と大学教員が連携した活動が始まる。当初は園で必要とされる活動を園長らと打ち合わせながら大学教員側が外部から持ち込んで定期的(毎月)に実施する段階である。

②年二回、園内で連携造形活動についての「カンファ

レンス」を実施し、大学教員が保育者に記録写真を見せながら、半年ごとの連携造形活動の実践の意図や、活動内での子どもの様子などを保育者と共有する。この時、大学教員は自身の実践に意見や改善点、よりよい子ども理解を得るために、保育者からフィードバックを得るというスタンスである。活動中の子どもの様子や作品理解など、毎日子どもに接している保育者だから知っていることや見えてくるものがある。保育者からフィードバックを得ることで、自身の取り組みを改善するとともに、月一回の連携造形活動と保育者との間に子どもを仲立ちとした接点をつくり、毎月の連携造形活動を共に考えていけるものにしていく。

③園内で外部講師による「研修会・講演会・ワークショップ」を開催し、連携造形活動やカンファレンスで共有したこと、園の取り組みで課題となっていること、新たに取り組みたいと思っていることなどを勘案しつつ、外部の専門家を招いて保育者と大学教員が共に学べる機会をつくる。それによって自分たちが何を問題と感じ、どんな課題を抱えているのかを外部講師の話や契機に語り合っ共有し、外部講師の助言を得ながら一緒に考え、今後の取り組みの中で何をどのように解決していけばよいのかを共に考える機会にしていく。

④課題解決の試行的な実践を行う場合もある。今回行ったのは「親子ワークショップ」である。保護者と子どもたちが一緒に遊ぶ活動を通して、子どもの発想や工夫、遊びの姿を間近に見て感じながら、保育者や大学教員が解説を加えることで活動を通して子ども理解を深めていく取り組みである。このように、研修会や講演会、ワークショップなど、実際に何かを一緒に試行してみることが重要である。

⑤「作品展・子どもアートカンファレンス・実践報告会」は、ここまでの年間の取り組みが形になって具体化される場である。日々の保育の多くのことを保護者と共有することには限界がある。しかし、日々の保育の背後にあるものもこうした機会があることで、作品やドキュメンテーションなどの記録とともに保護者に伝えることができる。子どもアートカンファレンスでは実際に各クラスの保育者が自身の保育で大事にしていることや活動事例をスライドの写真で紹介し、子どもを見る眼差しや保育の意図、子どもの姿やその理解について自分の言葉で紹介した。それは保護者にとってだけでなく、他の保育者にとっても同僚の保育を知り、自分の保育について考え、学びを深める機会となる。こうした一年の取

り組みを作品展や子どもアートカンファレンスを通して振り返ることで、次年度に取り組んでみたいことや改善点などが具体的に浮かび上がり、そのための取り組みを次年度の連携造形活動全体の展開の中に盛り込んでいく議論ができる。

こうした5段階のサイクルが毎年少しずつ内容を変えながら積み重なっていくことで、以下のような気付きや学びが生み出されている。

保育者にとって：

自身の保育を充実させ質的に深化させるとともに、学び続ける保育者としての資質と能力を高め、園全体の保育の質的深化を生み出す。

大学教員にとって：

個別の活動についてだけでなく、造形活動が保育の現場全体の中で何を可能にするのかについての新たな知見を得ることにつながる。

院生にとって：

園と連携した取り組みを実践し、それについて保育者や保護者からのフィードバックを得ることができ、気付きや学びを深めるとともに実践者・研究者としての実践的経験となる。

保護者にとって：

普段見ている我が子とは異なる側面や、保育、造形活動の中で浮かび上がってくる姿を知り、子どもの姿や育ちについて共に話を共有し合い、気付きと学びを深めていく機会となる。

そしてこうした取り組みのサイクルが、保育に関与する人々をつなぎ、子どもの育ちを支える環境や場づくりを促進することに寄与していると考えられる。それは保育や保育士、園や活動に対する信頼であり、参画（の意識）を生み出すことでもある。個々の連携造形活動はもちろん、それを軸としたサイクルを通して、関与する人々や保育全体のあり方をより豊かなものに変化させていく役割を、造形活動が保育の中で担うことができるのである。

9. まとめ

大学との連携造形活動と園内研修の取り組み、保育者と大学教員、院生との協働的な取り組みを通して、

造形活動を軸に保育実践の改善や質的深化が生まれ、子ども理解の共有と深まりを生み出していく仕組みが生まれていることが見えてきた。次の段階では連携造形活動のコンセプトや保育との関係性などをより明示的に示していく必要があるだろう。実践の構造とサイクルも年ごとに少しずつ変化していくものであるが、造形活動を軸に保育実践をより良いものにしていく連携的な取り組みを進めていく上で参照できる一つのモデルとなるものだと考える。引き続き保育者や園、院生や保護者との間に意義ある連携活動を生み出していきたい。

謝辞

ご協力いただいた特定非営利活動法人東京学芸大子ども未来研究所の皆様、学芸の森保育園の職員のみならず、保護者の皆様、そして子どもたちに御礼申し上げます。本研究は「公益財団法人日本生命財団 平成29年度委託研究（課題名：幼児教育における子どものアート活動を媒介とした多様性の涵養と親の学習支援プログラムの構築）」によるものです。財団事務局の皆様、研修会・講演会講師をお引き受けいただいた講師の先生方、研究支援課及び学系事務室の皆様のご支援ご協力に心より御礼申し上げます。

本論文は下記学会発表をもとに加筆修正と考察を加えたものです。

笠原広一, 真木千壽子 (2019) 「大学との連携造形活動と園内研修の取り組み1—保育者の学びと保育実践への展開可能性—」日本保育学会第72回大会 2019年5月4日・5日, 大妻女子大学 (東京都).

文献

- 笠原広一, 小室明久 (2016) 「学芸の森保育園との連携造形活動2016年度活動報告書」東京学芸大学教育学部 笠原広一研究室.
- 笠原広一, 小室明久 (2017) 「学芸の森保育園との連携造形活動2017年度活動報告書」東京学芸大学教育学部 笠原広一研究室.
- 笠原広一, 真木千壽子, 鉄矢悦朗, 小室明久, 塚本万里 (2018) 「造形活動を通した子ども理解の共有化に向けた基礎的知見の産出：学芸の森保育園での連携造形活動と作品展の保育者と保護者のアンケート分析から」東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系70, 65-81.